

## 2019年2月の大気大循環と世界の天候

### 大気大循環

500hPa 高度をみると、極うずの中心は、シベリアの北海上とカムチャツカ半島付近に位置した。北太平洋中部～ヨーロッパで波列パターンが明瞭となり、アラスカの南海上、米国東部、ヨーロッパで正偏差、米国西部、北大西洋の中緯度帯で負偏差となった。日本付近～その東海上で帯状に正偏差となった。200hPa 風速をみると、北アフリカ～ユーラシア大陸の亜熱帯ジェット気流は、平年の位置と比べて南寄りを流れた。日本付近～北太平洋西部、北米東部～北大西洋西部の偏西風は、平年の位置と比べて北寄りを流れた。海面気圧をみると、ベーリング海西部、グリーンランドの南海上で低気圧が発達した。アラスカの南海上、ヨーロッパ、日本付近～その東海上で正偏差となった。850hPa 気温をみると、アラスカ～その南海上、米国東部、ヨーロッパ、中国南部～本州付近で高温偏差、米国西部、カムチャツカ半島付近で低温偏差となった。

熱帯の対流活動は、日付変更線付近で活発、インド洋東部～インドネシア付近、フィリピン付近で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、中旬以降に大西洋～インド洋を東進した。対流圏上層では、インドネシア付近で南北半球対の低気圧性循環偏差となり、フィリピン付近～日本付近で波列パターンとなった。カムチャツカ半島付近～太平洋東部で波列パターンが卓越した。対流圏下層では、日付変更線の

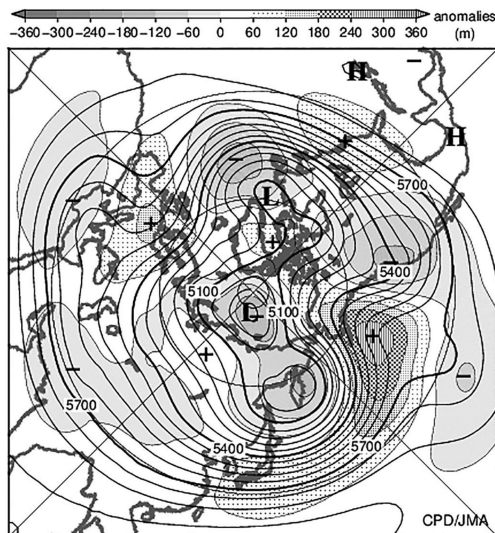
西～太平洋中部で南北半球対の低気圧性循環偏差、インド洋東部～インドネシア付近で南北半球対の高気圧性循環偏差となった。海面気圧は、赤道域では、インド洋～インドネシア付近で正偏差となった。南方振動指数は-0.9だった。

### 世界の天候

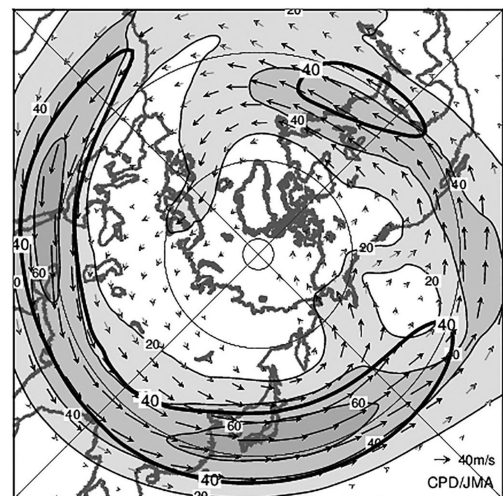
2019年2月の世界の月平均気温偏差は+0.32°C（速報値）で、1891年の統計開始以降4番目に高い値となった。2月の世界の平均気温は上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.80°C/100年（速報値）である。主な異常天候発生地域は次のとおり。

- 小笠原諸島～中国南部、東南アジア中部～南アジア南部、英国北部～ドイツ南東部、米国南部～南米北西部、オーストラリア東部～北部で異常高温となった。
  - カナダ南西部～米国南西部で異常低温となった。
  - ロシア北西部及びその周辺、ギリシャ南部～リビア北西部、北米南東部～西部で異常多雨、アルゼンチン北東部及びその周辺で異常少雨となった。
- （気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課）

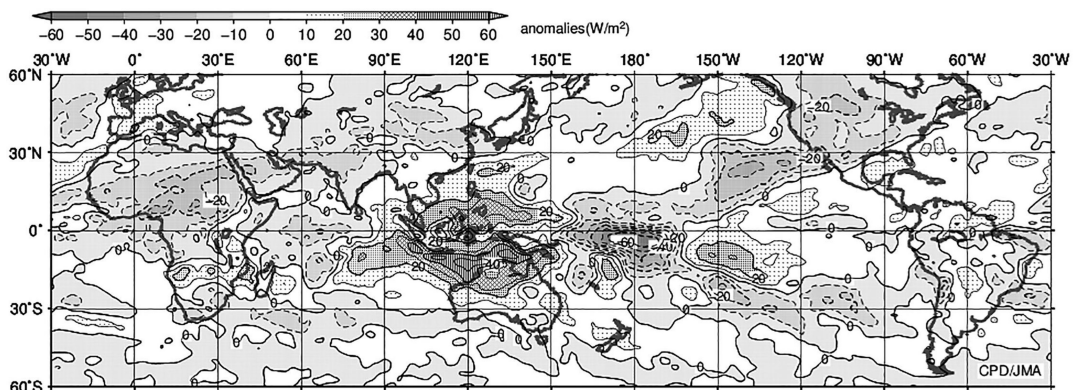
※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。  
<https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



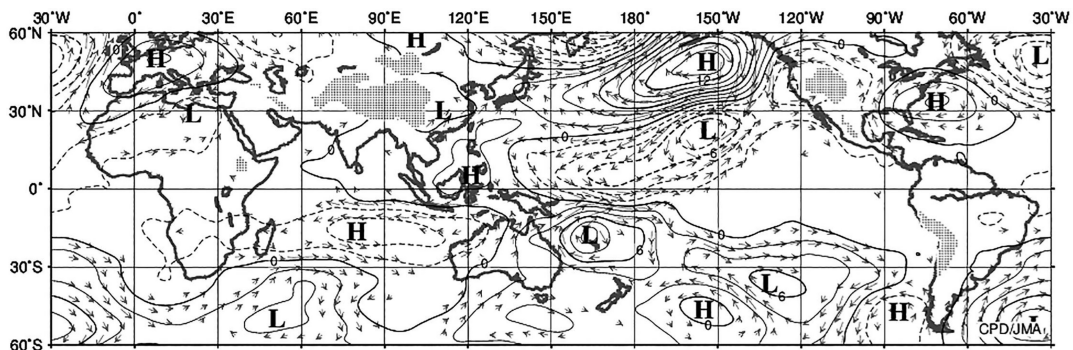
2019年2月の北半球月平均500hPa 高度及び平年偏差  
 等値線間隔は60m、陰影は平年偏差。平年値は1981～2010年の平均値。



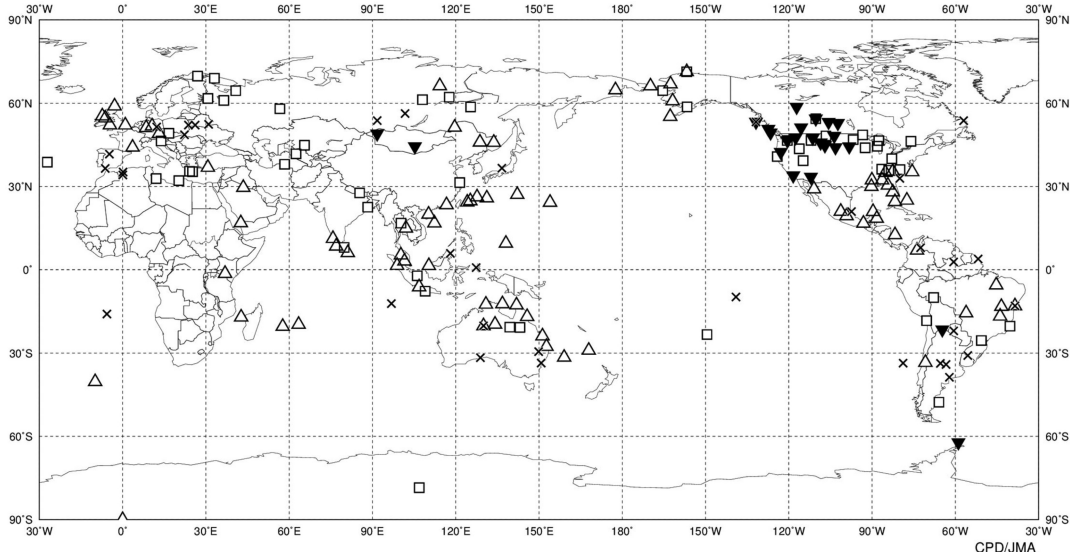
2019年2月の北半球月平均200hPa 風速及び風ベクトル  
 等値線間隔は20m/s、太実線は平年の風速で等値線間隔は40m/s。平年値は1981～2010年の平均値。



2019年2月の月平均外向き長波放射量年偏差  
 等値線間隔は10W/m<sup>2</sup>で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁 (NOAA) より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1981~2010年の平均値。



2019年2月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル  
 流線関数の偏差の等値線間隔は  $2 \times 10^6 \text{m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1981~2010年の平均値。



2019年2月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨  
 異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。